



Title	フランス的個人主義(さらには個人主義一般)を社会科学 的に分析するための理論的枠組への試み : 定義と 静学的成立条件
Author(s)	和多, 則明
Citation	études françaises. 1997, 30, p. 105-134
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93713
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス的個人主義（さらには個人主義一般）を
社会科学的に分析するための
理論的枠組への試み
——定義と静学的成立条件——

和 多 則 明

—目 次—

序 論

- I 仏仏辞典にみる個人主義の定義
- II 個人主義に対立する価値観の定義
- III 以下の分析の基本的枠組
- IV 価値観としての個人主義・集団主義の定義の細分化
- V 個人主義・集団主義の静学的成立条件
- VI 静学的条件の下での個人主義・集団主義の定義の細分化
- VII 個人主義・集団主義の定義の現実的拡大

序 論

本稿の目的は、フランス的個人主義さらには個人主義一般を可能な限り社会科学的に、また可能な限り理論的に分析するための枠組を考察することにある。したがって、本稿ではフランス的個人主義に関する歴史的な内容や、現在における実質的内容については除外する。あくまでも問題は、フランス的個人主義および個人主義が社会科学の理論の中にどのように位置づけうるかということについての試みである。

その目的は、より一般的には人間にとっての個人的自由と個人間の連帯

の問題の社会科学的基礎を考えることにつながっている。科学的証明は決して容易ではないが仮説としては、キリスト教の隣人愛、フランス革命の理念、民主主義的政治制度、社会主義などを貫いて個人的自由と個人間の連帯・友愛の問題はフランス人さらにはヨーロッパ人の統計的多数にとって一つの重要なテーマであったのに対して日本ではかならずしもそうではなかったという仮説を建てることができよう。その違いの原因がどうであれ、現実には南北格差や飢餓の問題、世界的規模の資源・エネルギー問題、環境問題、核兵器の分散の問題の解決に人類規模での個人の自由と個人間の連帯・友愛の問題が関係しているという仮説も同時に建てることができよう。もしそれらの仮説が現実と適合的であるならば、フランス的個人主義や個人主義を社会科学的に分析することは、将来の人類の課題の一つにつながるものとして位置づけることが可能である。

社会科学だけではなくおそらく科学一般において理論的枠組を考える場合、最も重要な問題は基本的用語をどのように定義するかの問題であろう。なぜなら、定義を明らかにせずに問題を科学的に明らかにすることは不可能であるからである。試みとしての本稿においては、定義それ自体が重要な位置を占めることになるが、とりあえず仮の出発点として仏仏辞典の中にある個人主義の定義を参考にすることにする。

I 仏仏辞典にみる個人主義の定義

任意に選んだ辞典は次の4種であり以下アルファベットで略して示す。

Hachette, Le dictionnaire du français (Hachette) …A

Paul Robert, Dictionnaire alphabétique et analogique de la
langue française (S.A.F.O.R.)…B

Grand Larousse de la langue française (Larousse) …C

Trésor (CENTRE NATIONAL DE LA RECHERCHE
SCIENTIFIQUE)…D

individualisme（個人主義）について、A では次のように定義されている。

個人の中に現実や最も高い価値をみる理論や概念

B では次のように定義されている。

- ①政治的，経済的，倫理的領域において個人の中に最高の価値をみる理論や傾向
- ②（政治学や経済学において）個人の権利と責任の拡大を目的とする理論や傾向
- ③（広義では）個人の意志や思考，個人の独立への選択を優遇する精神態度

また，補足的に次のような説明がみられる。

「軽蔑的な意味では，個人主義は利己主義と同じようにみなされる。」

「個人主義という言葉は不完全で両義的な言葉であり，たえず詭弁を生みだしてきたという説がある。」

- ④（社会学では）歴史・社会現象を個人の意識的行動によって説明しようとする理論（反意語は communisme, étatisme, totalitarisme, collectivisme, etc.）

C における定義はより詳細である。

- ①（広義では）個人を優越させ個人の中に最高の価値を見るあらゆる教義，傾向
- ②政治，道徳において社会的価値より個人の価値を優越させる理論。とくに，国家や社会制度が個人の幸福を目的とすべきであるとする理論。

- ③社会学において、歴史的イベントや社会現象を個人の意識的行動によって説明しようとする学説
 - ④他の人間とは無関係に自分を区別しようとする傾向
 - ⑤（軽蔑的な意味で）エゴイズムの性向
- 同義語は自立，非順応主義（non-conformisme）

D の定義は次の通りである。

- ①すべての他の現実的形態に対して個人を優越させ，個人に最も高い価値を与えるあらゆる理論や傾向
- ②（政治学では）個人と個人の主権に最大の重要性を与え，国家の役割を最小にしようとする政治的理念（反意語は étatisme または communisme）
- ③（社会学では）国家と社会制度が個人の福祉にのみ寄与すべきと考え，個人の権利と義務の発展を強調する学説（反意語は collectivisme, conformisme, fédéralisme）
- ④（軽蔑的な意味では）あらゆる連帯上の義務から自由になり，自分のためにのみ生きようとする傾向
- ⑤独立，自立の行動や精神（個人的主張や独創的表現の性向）

以上の定義から，まず個人主義というものが主として価値観であることが分かる。しかも「最も高い価値」，「最高の価値」，「優遇する」，「優越させる」といった言葉が示すように比較項を持っている。（B の①，C の④，D の④・⑤は除く） 比較項を持った表現で定義されているにもかかわらず，比較項については専門用語を除き A, B, C の場合には明示されていない。D の①においては比較項が入っているが，抽象的な表現に止まっておき具体的・現実的ではない。その意味ではそれらの定義は社会科学の定義としては必ずしも十分ではない。比較のありかたとしては個人が最高

の価値を持つものであれば、その価値との関係で関係のある事項がスケールにあてはめられ位置付けられることになるはずである。そのスケール上にはその数量の目盛りに対応したさまざまなものが位置付けられることになるが、社会的現実との関係において最も重要なものはそのスケールにおいて最低の値に位置付けられるものであろう。それは、個人主義と対立する主義にほかならない。言葉として分類すれば反意語になる。しかし上の辞典では B および D の専門用語としての反意語を除いて一般的な意味での反意語は示されていない。だが、社会科学的にみると、M・ウェーバーの指摘のように神なきあとの人間の社会的現実が価値観をめぐる「神々の闘争」にあるとすれば、個人主義という価値観がどのような価値観と対立・否定の関係にあるのかという問題は社会的現実をとらえる上で不可欠の問題となる。したがって以下、個人主義と対立する価値観について考察する。

II 個人主義に対立する価値観の定義

上の B, C, D の内容にもとづいて個人主義に対立すると思われる価値観・主義の定義をみることにする。C の同義語の *non-conformisme* と D の反意語からまず *conformisme* (順応主義) の定義を次にみてみよう。

A… 批判的精神の欠如のために、一般に認められていることに従おうとする人々の態度

B… 慣習に従おうとする行動

C… 既成の慣習や一般的になされている考えかたや行動の仕方に従おうとする性向

D… まわりの人々の考えや行動のしかたに基づいて自分の考えや行動を決める受け身的態度

現在用いられている意味は上のようなことから、個人主義と対比する主義としての側面は持っているが、慣習に対する態度に定義の重点がおかれていることとその言葉の宗教上の語源からいって個人主義に明確に対立する主義ととらえることは難しいように考えられる。それ以外の個人主義の反意語をみてみる。

まず、étatisme（国家社会主義）である。

- A… 経済的，社会的側面について国家の直接的介入によって特徴づけられる政治システム
- B… 経済社会的生活の全般にわたって国家の役割と権限を重視するような政治的理論
- C… 国家が経済に直接介入するような政治システム（反意語は自由主義，無政府主義）
- D… 経済社会生活の全体に国家が直接介入すべきであるとする政治的学説

同じように totalitarisme（全体主義）についてみると次のようになっている。

- A… 全体主義国家の政治システム・理論
- B… 全体主義的政治システム（反意語は個人主義，自由主義）
- C… ①全体主義的制度・理論（反意語は自由主義）
②横暴で高圧的な人の性格
- D… ①全体主義的政治システム
②唯一可能なものとして考えられた思考方法を課そうとする政治経済システム

反意語に個人主義がでてきており、人の性格に関する定義もあるが、国家社会主義、全体主義ともに主として政治的な定義で用いられると考えられる。政治的な局面やこれまでのフランスの歴史との関係ではそれらを個人主義に対立するものと位置付けることが可能であるが、個人が生活している社会的現実との関係では定義が限定されており普遍的ではない。個人が生活している社会的現実との関係で個人主義に対立する主義を最も普遍的なかたちで考えるならば日本語としては集団主義が最も適切と考えられる。この場合の集団主義の定義にあてはまる出発点の関係はある個人ともう一人の人間の関係である。逆に到達点は地球上の人間の数すべてを含んだ関係である。(実際、現在の世界的現実と個人の関係においては人類全体を視野におさめた集団主義が仮説としては成立しうる。その意味でいえば、順応主義、国家社会主義、全体主義というのは、集団主義という集合の要素と位置付けられる。) 2 とその限界数が集団主義の定義が成り立つ数的な範囲である。そのように考えるならば、フランス的個人主義の定義との関係だけではなく、個人主義一般との関係で対立する主義や価値を定義するには国家や政治システムに関係する言葉は適切でないことになる。それでは、フランス語の中で集団主義に当てはまる言葉は何なのだろうか。たとえば、Blaise LEMPEN はその著書の中で日本人の集団的行動について *collectivisme* という言葉でとらえている。(『L'avant-guerre nucléaire』1987, FAVRE) 可能性としてはこの言葉が集団主義にもっとも近いものであろう。仏仏辞典では次のようになっている。

A… 生産手段や交換手段を集団に帰属させようとする経済的理論

B… ①非国家主義的・非中央集権的社会主義を表す理論

② (広義では) 民主主義の原則、経済的には生産手段の集団所有によって特徴づけられる社会制度

C… 社会的問題の解決を集団の利益のための生産手段の共有に求めるシステム

D… ①経済学において

(1)生産手段および間接的消費財の共有に基づく社会組織化のシステム

(2)計画化や国有化による国家の経済的介入を許容するシステム

(3)集産化の結果生じる社会状態

②日常使用される広義において

(1)自由に同意された相互義務による生き方、またはその中において個人が相互に結び付けられているシステム

(2)外的強制による相互義務に基づく生き方、またはその中において個人が相互に結び付けられているシステム

A, B, C においては専門用語としての定義にとどまっているが、D においては日常用いられる定義が示されている。個人主義を日常用いられる広義でとらえるとすれば、反意語も日常用いられているものである必要があるだろう。加えて先に述べた個人との対比の普遍性からも D の②の定義のみが個人主義の反意語にふさわしいといえよう。また、たとえば A では *individu = être humain considéré isolément par rapport à la collectivité* であることからいってもそのようにいえるであろう。しかし、集産主義に対応する定義ではなく集団主義に対応する定義が示されているのは 4 辞典のうちただ一つであり *collectivisme* 以外に集団主義に対応する単語が見当たらないことからいうと、フランス語においては個人主義に対立するものとしての集団主義という単語は存在しないという仮説の方が数的には妥当ともいえ、それ自体別の研究対象を示唆している。わずか一つの辞典に示されているだけではあるが、本稿ではとりあえず個人主義に対立する価値観である集団主義にあてはまる単語を *collectivisme* としておく。

しかし、仏仏辞典の定義のみでは、個人主義と集団主義の定義がフランス的個人主義や集団主義を示すものなのか、個人主義一般を示すものなのかはわからない。本格的な分析のためには英英辞典や独独辞典などの欧米語辞典の定義を比較検討する必要がある。その比較検討によりフランス的個人主義と他の地域の個人主義の違いや個人主義一般の定義があきらかになるはずであるが、本稿ではそれらの点まであきらかにすることはできない。本稿では試みとして、仏仏辞典の上のような定義を参考にしながら一般的な個人主義と集団主義の定義について次のような仮説を建てることにする。

個人主義～集団よりも個人に価値（または最高の価値）を認めようとする
考え方（または思想）

集団主義～個人よりも集団に価値（または最高の価値）を認めようとする
考え方（または思想）

「思想」については人間が意識的に（自覚して）持っている考え方と定義する。」

（ただし、個人とは生物学的に定義しうる限りでの個体としての人間を指し、集団とは2個体以上の任意の数の人間の集合を指す。）

「個人」にしる「集団」にしるそれだけでは抽象的であるので、その定義の上に立って定義をより具体化してみる。

ある任意の個人の特性の集合（この場合の集合は数学的な意味での集合である）をBとする。集合Bの中にはその個人の人生の目的、感情、感覚（知覚）、常識、慣習、価値観、思考パターン、行動パターン、遺伝子的要因などのすべてを集合の要素をして含んでいることとする。他方、ある任意の集団の特性の集合をAとする。集合Aの中には、その集団の目的、共通の感情、共通の感覚、共通の常識・慣習、共通の価値観、共通の

思考パターン、共通の行動パターン、遺伝子の共通性か類似性などを中心的要素として含んでいることとする。集団の場合には、集合と要素の定義をはっきりさせられないあいまいさを含んでいる。たとえば、「共通」という言葉をどう定義するかの問題が残っている。統計的多数ととらえるか、より厳密な意味で共通ととらえるかは現実を分析する場合の目的とも関係している。また、ある任意の個人をその集団の中に含んで考えるかどうかという問題もあるが、ここではⅣ節との関係で二つを切り離してとらえておく。その集団を構成するすべての個人の特性のうち共通ではないものについてどうとらえるかについては、ここでは集団に含まれるものとする。そのように定義すると、個人主義は集合 B の価値の方を集合 A の価値よりも重視する考え方となり、集団主義はその逆となる。しかも一方の主義は別の主義を否定するか対立する関係にあることが必要である。それらの考え方と相互関係はいつの時代にも、いつの社会においても、どのような状況においても成り立つわけではない。どのような条件が必要かということについてⅤ節で考察するが、その前にその前提となる分析の枠組について触れる。

Ⅲ 以下の分析の基本的枠組

個人主義が一つの価値観であることから価値観一般について分析する上での基本的枠組についてまず仮説をたてることにする。ある価値観が存在するときそれに関連する項目をいくつか考えることができる。一つは、価値観に関係する現実そのものである。個人主義や集団主義の場合であれば、現実の世界における個人と集団のありかたとその相互関係がそれにあたる。これは主観的な世界とは区別され、すべての人が客観的なものと同意できる世界とも区別される存在そのものの世界である。この世界を R で表すことにする。その世界となんらかの関係を持つか、全く関係なしに任意の個人の R についての認識が成り立つ。いわゆる主観的な現実認識

の世界であり S で示す。R と S は一致するとは限らない。それらの上に立ってか、または全く無関係にある任意の個人の価値観の世界が考えられる (V で示す)。(価値観に関係するかたちでその個人のその時点での欲求・感情、過去の経験、信仰する宗教、それまでの知識などの項目があるが本稿では省略する。)そしてそれらの上に R, S, V を対象化し総合的にとらえなおす理性的～総合的認識 (T) がなりたつと仮定する。そして、それら四つの項目を変数と考え、全く無関係に成立する項目を独立変数 (I) とすると、次のかたちで相互関係の関数をまとめることができる。

$$T = F[V, S, R, I]$$

$$V = G[T, S, R, I]$$

$$S = L[T, V, R, I]$$

$$R = M[T, V, S, I]$$

T, V, S, R を構成する部分を $t(n)$, $v(n)$, $s(n)$, $r(n)$ とすると上の関数関係は次のようになる。

$$t(n) = f[\{T - t(n)\}, V, S, R, I]$$

$$v(n) = g[T, \{V - v(n)\}, S, R, I]$$

$$s(n) = l[T, V, \{S - s(n)\}, R, I]$$

$$r(n) = m[T, V, S, \{R - r(n)\}, I]$$

ある個人の持つ価値観が一つではなく、また平均的個人が現実には及ぼす影響を考えに入れると後者の関数関係の方が現実的であろう。変数で表したが、先の項目は必ずしも数量で表せるわけではないから、その意味ではこれらの関数関係は非現実的である。しかし、価値観に関係する項目の相互関係を整理し、価値観を総合的な視点から分析するためには関数関係で表すことは不可欠であると考えられる。上の関数関係をさらに現実の近付

けようとするならば、関係する変数のすべてに日付を入れる必要がある。いわゆる動学的分析になるが、本稿では日付の入らない静学的分析を中心に行なう。まず次のⅣ節では、 $v(n)=g[T, \{V-v(n)\}, R, I]$ (主として個人主義的価値観と他の価値観との現実的關係)について扱い、Ⅴ節で $s(n)=l[R, I]$ (主として現実についての主観的認識と現実の關係)について扱う。

Ⅳ 価値観としての個人主義・集団主義の定義の細分化

価値観というものが設定される場合一般について考えるなら次の二種類の設定場合がありうる。一つはその価値観が他の価値観と無關係に設定する場合である。この場合の価値観を独立変数的価値観と呼ぶことにする。たとえば、あれもこれも大切であると言うかたちで設定した場合でその両者に關係がないときがそうである。それに対して、ある価値観の設定が別の価値観となんらかの關係がある場合がある。その一つは、ある価値観の設定が別の価値観と対立・否定するような場合(いいかえれば矛盾するような場合)である。もう一つは、ある価値観の設定が別の価値観と連動し別の価値観も同時になりたさせるような場合がある。たとえば、個人主義と非順応主義や自由主義は連動する可能性が強いだろう。それらのふたつの種類の価値観は相関変数的価値観と呼ぶことができる。ただ前者は負の相関關係にあるのに対して、後者は正の相関關係にあるという違いはある。

その価値観についての分類を個人主義・集団主義にあてはめると個人主義・集団主義は次のように分類されることになる。

- a・独立変数的個人主義(または集団主義)
- b・相関変数的個人主義(")
 - b1・負の相関変数的個人主義(または集団主義)
 - b2・正の相関変数的個人主義(")

上の三種類の分類は個人の主観的な世界（S とする）にもあてはめることができれば、「神々の闘争」としての現実の世界（R とする）にもあてはめることができる。したがって S-R の組合せは 3×3 の 9 とおりあることになる。

01 (S-a~R-a)

主観的にも現実的にも個人主義（集団主義）と対立したり連動する価値観や主義はない。

02 (S-a~R-b1)

主観的には個人主義（集団主義）は独立しているが、現実的には他の価値観や主義と対立する。

03 (S-a~R-b2)

主観的には個人主義（集団主義）は独立しているが、現実的には他の価値観や主義と正の相関関係にある。

04 (S-b1~R-a)

主観的には個人主義（集団主義）は他の価値観や主義と対立しているが、現実的には無関係である。

05 (S-b1~R-b1)

主観的にも現実的にも個人主義（集団主義）と他の価値観や主義とは対立・否定する。

06 (S-b1~R-b2)

主観的には対立しているが現実的には正の相関関係にある。

07 (S-b2~R-a)

主観的には正の相関関係にあるが、現実的には無関係である。

08 (S-b2~R-b1)

主観的には正の相関関係にあるが、現実的には対立している。

09 (S-b2~R-b2)

主観的にも現実的にも正の相関関係にある。

個人または複数の個人の価値観を含んだ思想の定義としては先の三種類の分類でいいが、社会的な思想として社会科学的に分析する場合にはこの9とおりのケースを前提として分析し定義する必要があるであろう。ここでは、それら9とおりの場合を二つに分けて定義しておく。ひとつは価値観についての主観的な世界と現実的な世界が一致している01, 05, 09の場合であり、これらを価値現実的個人主義（集団主義）と定義する。のこりの6ケースは価値観そのものについての認識が現実的ではないという意味で価値幻想的個人主義（集団主義）と定義する。

V 個人主義・集団主義の静学的成立条件

先にのべたようなかたちで個人主義と集団主義を定義すると、その定義および、現実の個人主義・集団主義が成り立つためにはその前提条件が必要である。価値観の成立の原因については動学的成立条件として別に扱う。ここで扱うのは個人と集団という分け方、すなわちそれらの言葉そのものが現実との対応において成立するための条件である。それを明らかにするためにすでにふれた集合Aと集合Bの間に成り立つ関係を考える。

考えられる論理的（現実的というわけではない）関係は次の六つである。

- ① A が存在せず、B のみが存在する。
- ② B が存在しないことはありえないから、B が存在しないことは、
A=Bであることを意味する。
- ③ B が A の真部分集合である。(B が A に完全に含まれる。)
- ④ A が B の真部分集合である。(A が B に完全に含まれる。)
- ⑤ A と B が共通集合を持たないかたちで別れて存在する。(A と
B は互いに素である。)
- ⑥ A と B が共通集合を持ったかたちで存在する。

以上の六つの関係は、ある特定の個人の現実認識に関する主観的な世界（現実認識ではない理想に関する世界は含まない）と現実的な世界両方において成り立つと考えられる。その個人の現実認識に関する主観的な世界を S とし、現実的な世界を R とすると、S において S-①, S-②, S-③, S-④, S-⑤, S-⑥ が成立し、R において同じように R-①, R-②, R-③, R-④, R-⑤, R-⑥ が成り立つ。したがって人間が生きている現実 S-R においては、6×6 の 36 ケースがあることになる。それぞれのケースについて詳しく見てみよう。

01 (S-①～R-①)

主観的にも現実的にも集団が存在せず、個人のみが存在する。おそらく完全な自給自足の個人がこのケースにあたるだろう。この場合には、両方の世界において個人主義も集団主義も成立しない。(以下現実について成立しない・するというのは成立の根拠がない・あるという意味であり、その個人においてはそうであっても他の個人にとってはそうでない可能性があることを意味している。)

02 (S-②～R-①)

主観的にはその個人は集団と完全に一致しているが、現実的には集団は存在しない。すなわちその個人における集団の存在は幻想である。この場合には、個人と集団は別れていないのだからどちらかを高く評価することが成り立たない。すなわち個人主義も集団主義も成り立たない。

03 (S-③～R-①)

主観的にはその個人は集団の一部であるが、現実には集団は存在しない。現実には個人主義や集団主義は成り立たないが、主観的にはA-Bの差分について個人主義や集団主義が成り立つ可能性がある。

04 (S-④～R-①)

主観的には個人の一部分として集団があるが、現実には集団は存在しない。現実には個人主義や集団主義は成り立たないが、主観的にはB-Aの差分についてそれらが成り立つ可能性がある。

05 (S-⑤～R-①)

主観的には個人と集団は別れて存在するが、現実には集団は存在せず幻想である。主観的な世界においては個人主義と集団主義という言葉は成立しうるが、現実的基盤は欠いている。(別れて存在する場合にもどちらを価値あるものとして重視するかという立場が成り立つ。)

06 (S-⑥～R-①)

主観的には共通集合を持っているが、現実には集団は存在せず集団に関しては幻想である。主観的な世界においては個人主義、集団主義が成り立つ可能性がある。

07 (S-①～R-②)

主観的には集団は存在しないが、現実的には集団と完全に一致した形で個人と集団が存在する。その個人の主観においては個人主義も集団主義も成り立たない。現実的にも一致しているのだから、現実的にも個人主義、集団主義ともに成り立たない。

08 (S-②～R-②)

個人と集団の関係についてのその個人の認識が現実と一致しているともいえるが、根本的には、個人と集団という分け方そのものが成り立たない。すなわち関係そのものが成り立たない。したがってこのような個人と集団の関係は個人主義の立場に立っている人間からも、集団主義の立場に立っている人間からも集団主義的にとらえられうるが、それらの認識は論理的ではない。

09 (S-③～R-②)

主観的には集団の中にその個人は完全に含まれているが、現実には両者は等しい。現実については08と同じで個人主義も集団主義も成り立たないが、主観的には、 $A-B$ の差分について両者が成り立ちうる。

10 (S-④～R-②)

主観的にはその個人の中に集団が完全に含まれるが、現実には両者は等しい。現実については08と同じで個人主義も集団主義も成り立たないが、主観的には、 $B-A$ の差分について両者が成り立つ可能性がある。

11 (S-⑤～R-②)

主観的にはふたつは別れて存在するが、現実には完全に一致している。主観的な世界においては個人主義と集団主義が成り立つ可能性がある

が自己認識か集団についての認識か、どちらかまたは両方が幻想である。

12 (S-⑥～R-②)

主観的にはその個人と集団は共通集合を持ってずれているが、現実的には一致している関係である。その個人の意識においてのみ個人主義と集団主義が成り立つ可能性がある。

13 (S-①～R-③)

現実的には個人の特性の集合は集団の特性の集合に完全に含まれる関係にあるが、主観的には集団は存在しない。主観的には個人主義，集団主義は成立せず，現実的には成立する。

14 (S-②～R-③)

現実的には個人は集団に完全に含まれる関係にあるが，主観的には等号の部分集合である。主観的には個人主義，集団主義は成立せず，現実的には成立する。

15 (S-③～R-③)

現実的には個人は集団に完全に含まれる関係にあり，主観的にも同じである。A-B の差分について，主観的，現実的に個人主義，集団主義が成立する。

16 (S-④～R-③)

現実的には個人は集団に完全に含まれる関係にあるが，その個人の意識においては両者は逆の関係にある。現実的にも主観的にも個人主義，集団主義が成立する。ただし，その内容は同じではない。

17 (S-⑤～R-③)

現実的には個人は集団に完全に含まれる関係にあるが、その個人の意識においては個人と集団は共通の要素をもたず別れて存在する。主観的な世界においても、現実の世界においてもそれぞれの個人主義、集団主義が成立する。

18 (S-⑥～R-③)

現実的には個人は集団に完全に含まれるが、主観においては両者はそれぞれの差分を持った共通集合の関係にある。主観的な世界においても、現実の世界においてもそれぞれの個人主義、集団主義が成立する。

19 (S-①～R-④)

現実的には集団の特性の集合が個人の特性の集合に完全に含まれるが、主観的にはその個人において集団の特性の集合は存在しない。現実的には $B-A$ の差分の分について個人主義、集団主義が成立するが、主観的には成立しない。

20 (S-②～R-④)

現実的には集団が個人に含まれるが、主観的には両者は一致する。現実的には19と同じように個人主義、集団主義が成立するが、主観的には成立しない。

21 (S-③～R-④)

現実的には集団は個人に含まれるが、主観的には逆の関係になる。個人主義、集団主義とも主観的世界、現実的世界両方において成立する。

22 (S-④～R-④)

現実的にも主観的にも集団が個人にふくまれ、両方の世界において個人主義、集団主義が成立する。

23 (S-⑤～R-④)

現実的には集団が個人に含まれるが、主観的には両者は共通の要素を持たないかたちで別れて存在する。内容的には異なるが、主観的な世界、現実的な世界ともに個人主義、集団主義が成り立つ。

24 (S-⑥～R-④)

現実的には集団が個人に含まれるが、主観的にはそれぞれが差分を持った共通集合の関係を持っている。違った内容ではあれ、主観的な世界、現実的な世界両方で個人主義、集団主義が成立する。

25 (S-①～R-⑤)

現実にはその個人と集団それぞれが別れて存在するが、その個人の意識においては集団は存在しない。従ってその個人の集団について認識は幻想である。現実的には個人主義と集団主義が成り立つが、その個人の意識においては成り立たない。

26 (S-②～R-⑤)

現実にはその個人と集団は別れて存在するが、主観的には一致したものととらえられている。現実的には個人主義も集団主義も成り立つがその個人の意識においては成り立たない。

27 (S-③～R-⑤)

主観的には、個人が集団に完全に含まれており、A-Bの差分について

て個人主義，集団主義が成り立つ。現実的には主観的な世界とは違ったかたちで個人主義，集団主義が成り立つ。

28 (S-④～R-⑤)

主観的には集団が個人に含まれており， $B-A$ の差分について個人主義，集団主義が成り立つ。現実的には27と同じである。

29 (S-⑤～R-⑤)

主観的な世界および現実的な世界両方において個人と集団は共通集合を持っていない。両方の世界において個人主義，集団主義ともに成り立つ。

30 (S-⑥～R-⑤)

現実にはその個人と集団は共通集合を持っていないが，個人の意識においては共通集合を持っている。個人の意識において主として関係のとらえかたが幻想である。個人主義，集団主義は両方の世界において成り立つ。

31 (S-①～R-⑥)

現実にはその個人と集団が共通集合を持っているが，個人の主観においては集団は存在しない。その個人においては個人主義も集団主義も成立しないが，現実的には成立する。

32 (S-②～R-⑥)

現実にはその個人と集団が共通集合をもってずれているが，その個人の意識においては集団のみが存在する。しかしそれは集団主義と自覚されているわけではない。すなわちその個人の主観においては，集団

主義も個人主義も成立しない。現実的には個人主義，集団主義ともに成立する。

33 (S-③～R-⑥)

主観的には個人は集団に完全に含まれているが，現実的にはそれぞれが差分をもつ共通集合の関係にある。主観的にも，現実的にも個人主義，集団主義が成り立つ。

34 (S-④～R-⑤)

主観的には集団が個人に完全に含まれているが，現実的にはそれぞれが差分を持つ共通集合の関係にある。主観的にも，現実的にも個人主義，集団主義が成り立つ。

35 (S-⑤～R-⑥)

現実にはその個人と集団は共通集合を持っているが，主観的には別れて存在する。個人主義，集団主義は現実的世界においても主観的世界においても成立するが，その内容は個人と集団の関係の認識において異なっている。

36 (S-⑥～R-⑥)

現実的にも，主観的にも個人と集団は共通集合を持ってずれており。両方の世界において個人主義，集団主義が成り立つ。

以上みた36のケースにおいて，主観的世界または客観的世界のどちらか，または両方の世界において個人主義および集団主義が成り立つのは全部で32ケースである。(01, 02, 07, 08を除くのこりすべてのケース) そのうち，主観的な世界においてのみ成り立つのが8ケース (03, 04, 05, 06,

09, 10, 11, 12) であり、現実的世界においてのみ成り立つのが、同じく 8 ケース (13, 14, 19, 20, 25, 26, 31, 32) であり、両方の世界において成り立つのが (両方の世界の共通集合の要素数が) のこり 16 ケースである。現実的な世界において成り立つのは③, ④, ⑤, ⑥の場合に限られるが、主観的な世界においては①, ②, ③, ④, ⑤, ⑥のどの場合においても成り立つことになる。現実認識というものが、なんらかの現実的根拠を不可欠の前提とするという条件を設定するとすれば、成立するケースは 16 とおりである。さらに、個人の特性の集合 B と集団の特性の集合 A が全く共通の要素を持たない互いに素である関係は現実的にはありえないとすれば、個人主義や集団主義が成立する現実的条件としては、12 とおり (15, 16, 17, 18, 21, 22, 23, 24, 33, 34, 35, 36) のケースが持っている条件に絞られることになる。すなわち主観的世界の③, ④, ⑤, ⑥の場合と、現実的世界の③, ④, ⑥の場合の組合せのみにおいて個人主義や集団主義が成立することになる。しかし、それらの現実的条件を考慮にいれず、論理的な条件としてのみ考えるとすれば、個人主義がある任意の個人において成立するためには、現実的な世界はまったく関係なくなり、その個人の主観的な世界において集団の特性の集合が存在し (集合がゼロではなく)、個人の特性の集合が存在し (集合がゼロではなく)、その二つの間にずれか乖離があるという条件のみで個人主義や集団主義が成立することになる。ケースとしては主観的な世界においてのみ成り立つ 8 ケースと両方の世界において成り立つ 16 ケースを合計した 24 ケースがそれにあたる。それらの 24 ケースにおいて個人主義と集団主義のどちらかの主義の選択が可能となる。ただ、その 24 のケースに共通する条件はあくまでも個人主義や集団主義が成立するための前提条件であってその前提条件の成立が即個人主義や集団主義の成立につながるわけではない。なぜなら、ずれや乖離が存在しても、それら両方を等価なものとみなすことは可能であるからである。どちらかの主義を選択するためにはすでにどちらかの主義が形成されてい

るか、形成される原因が過去、その時点、未来のいずれかまたはいずれにも関係するかたちで存在することが必要である。その問題に関しては、この章の最初に述べたように静学的成立条件としてではなく、動学的成立条件として扱うべきだろう。

Ⅵ 静学的条件の下での個人主義・集団主義の定義の細分化

Ⅱ章で分析した条件が成立したとすると、個人主義・集団主義についてさらに分析することが可能になる。まず、定義の細分化が可能である。

Ⅱ章で個人主義・集団主義を主観的な世界と現実的な世界に分けて考察したが、それらふたつの世界の関係から、いくつかの細分化が可能である。先の36のケースのうち形式的なかたちで個人主義・集団主義が成り立つケースが全部で32あった。それら32のケースは二つのグループに分けることができる。ひとつは、集団の特性の集合と個人の特性の集合の関係について主観的な世界と現実的な世界が一致しているグループである。具体的には、15 (S-③～R-③), 22 (S-④～R-④), 29 (S-⑤～R-⑤), 36 (S-⑥～R-⑥)のケースがそうである。もうひとつのグループは両者が一致していないのこりの28のケースである。

最初の主観的な世界と現実的な世界が一致しているという条件の下で、集団の特性の集合と個人の特性の集合のどちらをより価値のあるものとみなすかで次の二つに分けることができる。

a. 現実的個人主義

b. 現実的集団主義

のこりの28のケースについても同じように次の二つに分けることができる。

c. 幻想的個人主義

d. 幻想的集団主義

この場合の現実的という基準は、集団の特性の集合と個人の特性の集合

の関係についての概略的認識（集合間の関係のパターン）が現実と適合的であるということである。だから、主観的な世界と現実的な世界が完全に一致しているということではない。現実的な世界と集合全体の要素数や、共通部分の要素数については差がある可能性があり、その差は現実との関係では幻想的であることになる。また、その差が大きくなれば、関係についての概略的認識そのものが c または d に変わる可能性がある。その意味では、 $a \cdot b$ と $c \cdot d$ は連続的であるといえよう。また、価値観や価値観を含んだ思想そのものが、科学的な意味では現実そのものではなく、人間の自分中心的設定にすぎないという立場からは幻想であることになり、現実的と幻想的という分類そのものが意味をなさないことになる。その立場との関係でいえば、ここでの現実的・幻想的という区別は主義や思想全体の分類ではなく、主義や思想を持つある個人の基礎的現実認識についての分類であるということになる。

28のケースを含む幻想的個人主義・幻想的集団主義については、その幻想度の強さからさらに細分化することが不可能ではない。しかし、出発点となる現実認識がそれぞれ異なるためその作業は容易ではない。基準を共通集合部分か部分集合部分の要素数の差に置くとひとつのランクづけができる。

まず、II章の冒頭で示した場合①の集団が存在しないにもかかわらず存在するというケース（03, 04, 05, 06）は他のケースと違い存在そのものに関する幻想である点でとりわけ幻想度が高いと位置付けられよう。場合②以下は関係についての幻想である点で共通している。（前者については現実的度合が低いと思われるので以下省略する。） それらの関係について次のように考えることにする。現実的にあてはまるということからいえば、集団の特性の集合の要素数の方が個人の特性集合の要素数より多いと仮定できよう。（その個人を含めて集団に関係する人間が二人のときを除くと人数的には個人をしのぐという意味である。）モデルとして、A

の要素数を100, Bの要素数を50, 共通集合の要素数を25とする。現実の世界においては個人が集団に完全に含まれる関係にあるという③の場合をとると現実における共通の要素数は50である。それに対して, 主観的な世界においては共通集合を持ったかたちでとらえられている場合⑥では共通の要素数は25となる。互いに素である場合⑤においては共通の要素数は0である。したがって要素数から現実との距離(すなわち幻想度)をランクづけると⑥→⑤の順に幻想度が強くなる。ただ, 要素のいくつかについてその重要性に対応したウェイトをつけるとすれば必ずしも同じ結果にはならないが, 複雑になるため本稿では同一のウェイトとみなすことにする。

残る場合⑥は, 要素数からいうと $B(50) > A(100)$ と成り立たない。集団の特性の集合の要素数の方が個人の特性の集合の要素数より多いという前提が現実的であるとすれば, 現実的に成り立たない関係と言う意味で幻想度が最も強い場合として位置付けることができるだろう。以上のような基準に基づいてまとめたものが次の表である。

		主観的な世界 S		
		幻想度のランク		
		I	II	III
現実的な世界 R	②	③および④	⑥	⑤
	③	⑥	⑤	④
	⑤	⑥	③	④
	⑥	③—⑤	③—⑤	④

上の表でランク I→II→IIIの順で幻想度が強まる。縦の列については要

素数が同じでありランク付けられない。場合⑥のランク I, II については③または⑤のときと③および⑤のときがある。B の集合の要素数を β , 共通集合の要素数を α とすると, $\beta > 2\alpha$ のときはランク I が⑤, ランク II が③となり, $\beta = 2\alpha$ のときは③および⑤がランク I となり, $\beta < 2\alpha$ のときはランク I が③, ランク II が⑤となる。なお主観的な世界の②については現実的な世界が⑤のときにはランク II とランク III の間に位置付けられるが, 現実的な世界が③または⑥のときには現実的な世界の共通の集合要素数によってランクづけが変化することになる。要素数の明確化によって②を上表に組み入れた場合はランク数は IV にまで拡大するが, 本稿ではとりあえず上の表に基づいてランク III までとすると幻想的集団主義と幻想的個人主義は次のように細分化できることになる。

c. 幻想的個人主義—ランク I

—ランク II

—ランク III

d. 幻想的集団主義—ランク I

—ランク II

—ランク III

Ⅶ 個人主義・集団主義の定義の現実的拡大

Ⅱ節で触れたように個人主義や集団主義を人間の持つ思想として考え, そして思想というものを人間が意識的に (自覚して) 持っている考え方と定義するなら, 哲学者や思想家だけではなく現実の統計的大多数の人間を社会科学的に分析する場合にはそれらの用語だけでは不十分である。なぜなら, それらの用語は, 人間が意識せずして持っている個人主義的考え方や行動などや集団主義的考え方や行動などを含んでいないからである。たとえば, ある国民の歴史的に形成された国民性に関係するようなことの場合

合にはその国民によっては必ずしも自覚されていない可能性が強いであろう。フランス人が日本人からみて個人主義的であっても、それはフランス人が思想として個人主義を持っているとはいえない。フランス人の中の誰かが個人主義を思想として持っていることと、フランス人統計的多数が個人主義的であることとは同じではなく、明確に区別する必要がある。同じように、フランス人からみて日本人が集団主義的に見えても、それは日本人が集団主義という思想を持っていることを意味しない。

国民性に関係する場合だけではなく、年齢や性別に関係するかたちで同じような問題がある可能性があり、さらに根本的には人間の中の動物的本能に関係するかたちでも同じ問題が生じうる。動物的本能との関係でいえば、動物の社会との連続性の中で人間の個人に関する行動と集団に関する行動をとらえようとするなら、個人主義や集団主義という言葉だけでは、問題を混乱させることになる。問題を混乱させずにより広い関係のなかでとらえるためには定義を拡大する必要があるだろう。動物的本能への視野も含んで無意識の個人主義的考えかたや行動などを「個体中心的生命活動」と定義し、無意識の集団主義的考え方や行動などを「集団中心的生命活動」と定義する。人間に重点をおいた場合には前者を「個人主義的生き方」、後者を「集団主義的生き方」とする。これらの定義とこれまでの定義の間で次のような組合せが成り立つことになる。

個人主義の分類

- (1) 個体中心的生命活動-現実的個人主義 (価値現実的個人主義を含む)

(個人主義的生き方)

- (2) 個体中心的生命活動-幻想的個人主義 (価値幻想的個人主義を含む)

(個人主義的生き方)

(ランク I, II, III)

(3) 集団中心的生命活動-現実的個人主義 (価値現実的個人主義を含む)

(集団主義的生き方)

(4) 集団中心的生命活動-幻想的個人主義 (価値幻想的個人主義を含む)

(集団主義的生き方) (ランク I, II, III)

集団主義の分類

(1) 集団中心的生命活動-現実的集団主義 (価値現実的集団主義を含む)

(集団主義的生き方)

(2) 集団中心的生命活動-幻想的集団主義 (価値幻想的集団主義を含む)

(集団主義的生き方) (ランク I, II, III)

(3) 個体中心的生命活動-現実的集団主義 (価値現実的集団主義を含む)

(個人主義的生き方)

(4) 個体中心的生命活動-幻想的集団主義 (価値幻想的集団主義を含む)

(個人主義的生き方) (ランク I, II, III)

上の分類はあくまでもモデル (理念型) としての分類であり、現実には連続的であるだろう。また、それらは定義の単純な組合せであって、それ

それがどの程度現実的かということは考慮していない。もし、個体中心的生命活動や個人主義的生き方が無意識の領域を支配しているとすれば、現実の認識そのものも支配している可能性が強まる。だとすれば、個体中心的生命活動や個人主義的生き方は現実の認識そのものを個人主義の方に偏らせ、偏りの分だけ幻想的個人主義に近付かせる可能性がある。他方、集団主義的生き方は、それに対する反発から同じように幻想的個人主義を生む可能性があることになる。（そのことは同じように集団主義についてもいえるだろう。）フランス的個人主義やそれに反発する思想が上のどれにあてはまり、どの程度の幻想の上に成り立っているかということについては、現実のフランス社会における個人と集団の関係についての詳細なアンケート調査とそれにもとづいた社会科学的分析を必要とする。

（続）